

『更級日記』読解の課題

— 御物本の傍記と勘物をめぐって —

小 川 剛 央

—

『更級日記』について『日本国語大辞典』を引くと、次のように書かれている。^①

日記。一卷。菅原孝標女著。一三歳の寛仁四年（一〇二〇）九月、父の任国上総（千葉県）から帰京した旅に筆を起し、夫、橘俊通と死別した翌年、康平二年（一〇五九）五二歳の頃までの回想記。物語への憧れと夢の記事が多い。平安時代の中流貴族の女の半生が鋭い感覚で印象的に記される。さらしなのにき。

（傍線は稿者が付した。以下、特に断りがない場合は同様。）

これは、今日一般に知られている『更級日記』の理解と言って差し支えないだろう。ここで押さえておきたいのは、『更級日記』が菅原孝標女の手による、自身の半生を顧みて執筆された回想記として捉えられているという点である。要するに、『更級日記』の本文には菅原孝標女の実人生が反映されているとの理解のもと、説明がなされているのである。

このような理解は、今日の国語教育の場においても広く浸透しているもののように思われる。例えば、近年高等学校で使用する教科書や国語便覧を見ると、そのような理解に基づいた記述が散見される。

「作者」菅原孝標女（一〇〇八―一〇五九以後）。……作者の生涯は『更級日記』でたどることができるが、51歳で

夫橘俊通に先立たれて以後の記述がないため、晩年の消息はわからない。(中略)

「内容・構成」作者が13歳から老境までの約四〇年間の人生を回想的に綴った日記である。少女期を上総国で過ごした浪漫的な女性が現実の中で挫折し、信仰の世界に魂の安らぎを求めるに至る精神遍歴が描かれている。(中略)

「史的意義」当時の受領層の女性の生涯を、自照的に描いた作品である。私小説的な性格を備えた『蜻蛉日記』の系列をひき、現実の自己とその生涯を対象化して描こうとする意識に注目すべきものがある。

〔シグマベスト 原色シグマ新国語便覧増補三訂版〕(文英堂、二〇一七年)

このほか、『精選 国語総合 古典編 改訂版』(筑摩書房、二〇一八年一月)や『改訂版 古典B 古文編』(数研出版、二〇一七年二月)など数社の教科書を参照しても大同小異の記述がみられる。いずれの解説においても、『更級日記』は作者菅原孝標女がおよそ四十年にわたる自身の生涯を後年のある時点から回想的に綴ったものであるという点で共通しており、『更級日記』の本文に作者菅原孝標女の実体験を読み取っている。

こうした『更級日記』の本文に実在する人物としての作者菅原孝標女の体験を読む態度は、注釈書の記載や本文の解釈にまで及んでいることも珍しくない。例として、『更級日記』

よりいくつかの場面を引用したい。^②

十七日のつとめて立つ。昔、下総の国に、まのてうといふ人住みけり。正布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし
その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明かきに、風の音もいみじう心ほそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の
夜の月 (一五—一六頁)

右は、「まのの長者」^③伝説として知られている一節である。傍線を伏した「くろとの浜」について、引用の底本である『集成』の頭注では「千葉市の黒砂(稲毛と登戸の間)の古名とする説や、限られた一地带ではなく、津田沼・幕張一帯の称とする説がある。道順としては後者が妥当。」とあるのみだが、『新編日本古典文学全集』^④の頭注には次のように書かれている。

千葉県木更津市小櫃川の河口付近(上総)を黒戸浜という。

とすれば再び上総に逆行したことになる。作者の記憶違いであろうか。……なお、以下の紀行中の地名にもしばしば不審な点があり、作者の聞き違い、記憶違いと思われる例がまま散見する。

『新全集』が指摘しているように、『更級日記』に書かれている地理の位置関係が実際のものと異なっていると読める箇所が少なくない。しばしば取り上げられる箇所であるが、業平関係で語られている「あすだ川」のくんだりなども同様の指摘がされることがある。

野山蘆荻の中を分くるよりほかのことなくて、武蔵と相模との中にゐて、あすだ川といふ、在五中将の「いざ言問はむ」と詠みける渡りなり、中将の集には隅田川とあり、舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。

(二二頁)

例によって『新全集』は「記憶違い」と捉えているが、このような理解は『更級日記』の本文に菅原孝標女の実人生の反映を読み取る姿勢が前提にあると考えられる。すなわち、「記憶違い」とする解釈は「日記は作者が実際に体験したことをありのままに書く」とする姿勢に依拠したものである」という前提に立つことではじめて成立する解釈なのである。

また、従来記憶違いとして捉えられてきた箇所は、女性日記文学には表立っては主張しづらい抑圧された平安期の作者の思いや考えが率直に反映されているという文学観を前提にしていると考えられるが、テキストと作者の実体験とは直截に結び付くわけではない。そうした理解はテキストから読みとれる内容や書かれた背景等を見えにくくしてしまう恐れがある（なお後述）。それに加えて『更級日記』の本文から読み取れる「作者」と、実在の人物としての作者菅原孝標女は区別して考える必要があるという方法的な問題もある。

そうした女性日記文学とその作者の関係が抱えている問題点について、土方洋一は次のように述べている。

しかし、日記文学にカテゴライズされるテキストを対象に書かれた論文に眼を通して見ると、内面的な記述が見られるということ、作者がそれを自覚的に、自己目的に行なっているという理解に一足飛びに結びつけているように見える論にしばしば出会う。作者が自らの内面を自覚的に一人称で書いたものが日記文学だというジャンル意識の背後には、明らかに近代的な文学観、作者主体観が暗黙の前提として存在している。多少誇張した言い方をすれば、『かげろふの日記』の作者「道綱母」を、近代の女性とは異なる内面を抱えつつ、ただ婚姻制度その他の面で近代とは異なる時代環境を生かされたがゆえに違和感を感じつ

つ一生を送った女性のように見なしているのではないかと疑われる論を目にすることすら稀ではない。

テクストから判明に読みとられた作者の〈内面〉は、そのようなテクストを書かずにはいられなかった、あるいは書くことを通して自己の人生の意味を再認識し得たというような理解を経由して、テクストが成立した動機の説明としても機能してしまう。さらに困ったことには、同時代の言語環境から明らかに突出しているこれらのテクストが成立し得た理由まで、作者の〈内面〉と書く〈意志〉に回収されて了解されてしまう。

日記文学のテクストに直ちに実在する人物としての作者の体験を見出すことは、作者の存在を無批判に投影した偏ったテクストの解釈であり、実際に日記が書かれるに至ったテクスト成立の過程や時代背景、さらには日記の解釈を狭めてしまうことに繋がるおそれがある。テクスト上に作者の存在を前提とするのではなく、絶えず日記に書かれている内容に立ち返って、作者とテクストの関係を一度見つめ直した上で読みを深めていく必要があるだろう。

先の『更級日記』の業平に関する場面についていえば、作者の問題ではなく、テクストの構成上の問題として捉えることができる。上洛の記をめぐる問題をテクストの構成上の問題として扱った論文に、土方洋一「体験と意味——『更級日記』の上洛

の記と結末——」^⑨がある。

ここでは国の境を越える際に格別の出来事も起こらず、ただ著名な在原業平の詠歌に言及されている。実際には下総と武蔵との境を流れる隅田川がこの位置に移行させられている点については、『古今集』の詞書や『伊勢物語』に隅田川的位置が武蔵国と下総国との間と明記されている以上、単純な記憶違いということはありません、意図的に川的位置が変更されたものと考えるべきである。

このように、従来記憶違いとされることの多かった箇所は、『更級日記』というテクストが作者の単純な実体験の反映ではなく、独自の構成意識によって再構成されたものであることを示すものととらえることができる。

二

実際の出来事と『日記』に書かれている内容に差異があると見られる例は、テクストの随所に確認できる。

例えば「あさみどり」の歌が詠まれる場面、『更級日記』の本文では

十月ついたちごろのいと暗き夜、不断経に、声よき人々読むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかりたち出で

聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、参りたる人のあるを、「逃げ入りて、局なる人々呼び上げなどせむも見ぐるし。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」と言ふいま一人のあれば、かたはらにて聞きあたるに、おとなしく静やかなるけはひにてものなど言ふ、くちをしからざなり。(中略) 春秋のことなど言ひて、「時にしたがひ見ることに、春霞おもしろく、空ものどかに霞み、月のおもてもいと明かうもあらず、遠う流るるやうに見えたるに、琵琶の風香調ゆるるかに弾き鳴らしたる、いといみじく聞こゆるに、また秋になりて、月いみじう明かきに、空は霧りわたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたりたるに、風の音、虫の声、取りあつめたるこちするに、箏の琴かき鳴らされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおほゆかし。(中略)」といひつづけて、「いづれにか御心とどまる」と問ふに、秋の夜に心を寄せて答へたまふを、さのみ同じさまには言はじとて、

あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の
夜の月

と答へたれば、かへすがへすうち誦じて、……

(八一—八二頁)

とあり、高倉殿での不断経の夜に同僚女房とともにいたところへ訪れた貴公子との間でよみ交わされたことになっている。し

かるに、『新古今和歌集』¹⁰では、

祐子内親王、藤壺に住み侍りけるに、女房上人などさ
るべきかぎり、

物語して、春秋のあはれいづれにか心引くなど争ひ侍
りけるに、人々

多く秋に心を寄せ侍りければ

菅原孝標女

あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の
月

(『新古今集』巻第一・春歌上・五十六)

とあり、祐子内親王に付き従う形で内裏の藤壺に伺候していた折に、同僚女房や上達部とともに春秋の優劣を競って詠まれた際の歌として掲げられている。『新古今集』の撰者たちは「あさみどり」の歌をいかなる資料から採歌したのか。考えられるのは、『新古今集』が『更級日記』の記述をもとに採録した可能性と、『更級日記』以外の孝標女集とでもいうべき家集から採録した可能性である。

この問題について、福家俊幸は次のように述べている。¹¹

この詞書に拠ると、祐子内親王が参内し藤壺に住んでい
たとき、殿上人や女房たちとの間で、春秋優劣論が話題と
なり、そこで多くの人々が秋に心を寄せた中で、孝標女は

で、これとて仮説の域を出ないのであるが。

この歌を詠んだという。ここでは『日記』に書かれたような時雨降る夜の高倉殿の出来事ではなく、内裏でしかも衆目を集める場での出来事ということになる。『新編全集』の頭注は「このことは『新古今和歌集』の撰者らが『更級日記』ではなく、より素朴な詞書の、孝標女の歌稿ないし家集からこの一首を採ったことを思わせる」と説く。『全評釈』はその前の祐子内親王の参内に付き従って、藤壺に滞在した記述などから、『新古今』編纂者が粗雑に『日記』を読んだことからこのような詞書になったとする。まったく違う立場からの見解であるが、どのように解すべきなのだろうか。確かに後者の見解のように前の部分に孝標女が祐子内親王に付き従って藤壺にいたことが記されていた。しかし、そこで彼女は「天の戸を」で始まる歌を詠んでいた。それだけではない。それ以降も頼通方や同僚の女房達と詠んだ和歌が羅列されているのである。仮に「あさみどり」の詠歌状況を知らうとして『更級日記』を読んだとすると、それはどんなに粗々に読んだとしても、歌の前の地の文までであり、その間に歌があれば、その前の部分は別の状況であると考えるのが自然なのではないだろうか。また秋に多く心を寄せた人がいたという状況も『日記』とは乖離している。そのように考えると、この『新古今』の詞書が『日記』に取材したとは考えにくくなるのである。もちろん「菅原孝標女集」のようなものは現存していないの

『新古今集』が参照した資料が何であるかという問題については、『新古今集』が『更級日記』を大まかに読んで採録したと捉えるのではなく、福家俊幸の指摘のように別の資料に取材した可能性の方がやや有力であるように思われる。

さらに当該箇所が付随して考えられることは、『更級日記』の虚構化の問題である。『新古今集』が、和歌の詠歌状況を厳密な態度をもって採録するという基本方針が取られている勅撰和歌集である以上、実際の出来事により近いと考えられるのは『新古今集』の示している詠歌状況であり、『更級日記』の本文は実際の出来事を潤色して書かれたものであるという可能性が見えてくる。『更級日記』の記述は実際の出来事をありのままに書いたものではなく、実際の出来事に取材しつつもそれに虚構化を試みながら再構成したものであると考えるのが妥当のようである。

実際の出来事と『日記』に書かれている内容に差異があると見られる例は、当該場面に続く貴公子源資通と別れた直後のくだりでも確認できる。

またの年の八月に、内裏へ入らせたまふに、夜もすがら殿上に御遊ばありけるに、この人のさぶらひけるも知らず、その夜は下に明かして、細殿の遣戸を押しあけて見出だし

たれば、暁がたの月のあるかなきかにをかしきを見るに、
沓のこゑ聞こえて、読経などする人もあり。

(八四―八五頁)

当該箇所¹²⁾の御物本『更級日記』の傍記には、「長久四年七月廿三日両宮入内 御東南対 一条院儀也 八月十日両宮御退出」とあり、本文に「またの年の八月に」とあるのとやや相違する。また、同じく御物本の注記によれば前年にあたる長久三年十二月八日に内裏が焼亡したという大きな出来事が起こっているが、『更級日記』にはそうした出来事は全く書かれていない。

さらに、傍記には「同年(長久四年―稿者注) 十二月一日一条院焼亡 二日遷御高陽院 廿一日自高陽院遷御東三条」とあり、一条院内裏が焼亡したことで祐子内親王が十二月二日に高陽院へ、二十一日には東三条院へ遷御したと記されているが、『更級日記』には内裏焼亡のことは一貫して書かれていない。その頃の出来事として書かれているのは、「参りたる人」(源資通)とのやり取りが次のように書かれているのみである。

春ごろ、のどやかなる夕つかた、参りたなりと聞きて、その夜もろともなりし人とあざり出づるに、外に人々参り、内にも例の人々あれば、出でさいて入りぬ。あの人もさや思ひけむ、しめやかなる夕暮れをおしはかりて参りたりけるに、騒がしかりければまかづめり。

このやりとりが行われた場所がどこであったのかは『更級日記』には記されていない。こうした箇所は、実際に体験した出来事を「参りたる人」との交流という一貫した主題性のもとに編集し再構成したものと考えられ、内裏焼亡の出来事は前後の内容や構成といったテキストの都合上除かれたものと考えざるを得ない。

構成の問題と考えられる箇所は、続く場面にも確認できる。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、十一月の二十余日、石山に参る。

(八六―八七頁)

これは「参りたる人」との交渉が絶えたあと、「作者」が信仰に向かうさまを記した箇所である。傍線を付した「双葉の人」は夫橘俊通との間に生まれた仲俊を指すとされるが、俊通との仲を記す記事やお産および仲俊の成長などといった出来事には全く触れられていない¹³⁾。夫俊通の描写が少ないことに対しては

(八五―八六頁)

「喜びの乏しい結婚生活」であつたとする解釈が示されているが、こうした見方は女性が書いた日記には結婚生活や子育てなどの出来事を記した記事が書かれるはずであるという文学観を前提としている。

しかし、孝標女が夫俊通とどのような結婚生活を送りどのよう感じていたかは確かめるべきでないし、日記にそうした思いが素直に反映されているとは限らない。この場面などは「喜びの乏しい結婚生活」の端的な表れとして捉えるのではなく、テクストの構成上の問題としてあらためて考える必要があるだろう。夫や子どもについての描写がほとんど見られないのは、「作者」の結婚生活が幸福なものではなかったからというよりも、『更級日記』がそうした出来事を記すことを求められるテクストではなかったというのがその理由であると思われる。

このように考えると当該場面は、前段で華やかな宮仕えの空間で起こった洗練されたやり取りを記すことで、そうした場身を置くことに心理的抵抗を覚える「作者」が信仰へと向かう姿を対比的に描くことに重点が置かれた、テクストの構成上の工夫と言えるだろう。夫の存在や、一子仲俊の誕生などといったできごとは、こうしたテクストの構成上の流れの上からは余剰な事柄なのである。『更級日記』の記述は一定の主題性の下に構成されたものであるため、その記述から孝標女の実人生を復元しようとする作業には論理的誤謬があるということを確認しておきたい。

三

前節で確認したように、『更級日記』の本文には作者菅原孝標女の実人生がそのままに反映されているわけではない。「記憶違い」という解釈が記されている『新全集』などでも、『更級日記』の本文すべてに菅原孝標女の実体験が反映されていると捉えられているわけではなく、ある時点での作者が自身の人生を回想し、その中で見聞きしたものと体験した事柄などを再構成したものであるとの見方を示している。¹⁵⁾

菅原孝標女のイメージは、今日、生涯を夢見続けた文学少女として定着したかに見える。物語の耽読、その結果としての甘美な空想、おおむね幸福な結婚生活、亡夫追慕の感傷と孤愁といった図式である。だが、『更級日記』は明らかに読者を意識した執筆であり、そのための素材の取捨・作意・虚構も当然、予想されよう。作品から事実と虚構を抉別解析する作業はきわめて困難であるが、なおかつ、そこに垣間見られる作者の素顔・実人生というものは、決して甘美な空想に耽溺し得るほど微温的なものではなかったようである。少女期はともかく、彼女の夢想は不如意な現実認識を媒介とするものでこそあれ、無自覚な夢見心地とは思われない。むしろ彼女は、意外に現実的な中期の安定を選び取る。やがて人生の黄昏の中で、そのように生き

ざるを得なかった受領層の「家の女性」の生涯を、回想のうちには遠景化し、自嘲と悔恨をこめた自叙を綴りあげてゆく。当時の宮廷女流の多くが、個々の歌反古を愛惜、生涯の形見としての家集を自撰するとき、すでに家集から脱皮して、ともかくも人生を連続の相において捉えなおしたこの日記の作者は、やはり特異な個性と表し得よう。

『更級日記』は作者が体験した出来事を取捨選択したり、ときには虚構を交えながら執筆されたものであろうという見方には同意できる。しかしながら、「そこに垣間見られる作者の素顔」という表現や「やがて人生の黄昏の中で、そのように生きざるを得なかった受領層の『家の女性』の生涯を、回想のうちに遠景化し、自嘲と悔恨をこめた自叙を綴りあげてゆく」、「ともかくも人生を連続の相において捉えなおしたこの日記の作者は、やはり特異な個性と表し得よう」などの表現に見られるように、日記が再構成されたものであるとの見方と実作者の体験が反映されたものであるとの見方がはつきりとした区別のないまま分かちがたく記されているような印象を受ける。確かに、『更級日記』の本文から「事実と虚構を抉別解析する」ことは至難の業であるように思われるが、繰り返し確認しているように、日記に書かれている内容は作者の実人生がそのままに反映されたものとする前提自体に問題があるのである。

実のところ、『更級日記』というテキストの中で「作者」の

イメージを形成する要素は、御物本『更級日記』に記されている傍記と勘物および奥書である。

『更級日記』では、冒頭で「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と書き出されているように、人物を實在の人物として明示的に表すことを避け、婉曲的な表現や抽象化された呼称が多用されている。平安朝の仮名文にしばしば用いられる官職名や身分によって登場人物を呼称する「侍従の大納言の御むすめ」(三三頁)や「皇太后宮の一品の宮」(三七頁)などの例も見られるものの、『更級日記』において特に注目されるのは「姉継母などやうの人々」(一三頁)や「乳母なる人」(二六頁)、「をばなる人」(三四頁)などの一般化された呼称が多々見られることである。こうした表記と實在の人物を結びつけているのが、御物本『更級日記』を書写した藤原定家による勘物や奥書である。

御物本『更級日記』の奥書には次のように記されている。

先年伝得此草子。件本為人被借失、仍以件本書写人本、更書留之。伝々之間、字誤甚多。不審事等、付朱。若得証本者、可見合之。為見合時代、勘付旧記等。

(先年この草子を手に入れたが、その本は人に借りられ、なくされてしまった。そこでその本を書き写した人の本を参照して、あらためて書き写したのがこの本である。人の手で書き写されてきた間に、字の誤りがはなはだ多

くなっている。不審の箇所などには朱点を付しておいたが、もし証本を手に入れることができたなら、見合わせるつもりである。時代を照合するために、古記録などを調べて、付記した。―稿者記）

定家が『更級日記』を書写した時点ですでに参照した本文に字の誤りが多くあつたことが記されている。注目したいのは『為見合時代、勘付旧記等』と書かれている箇所である。定家は『更級日記』の本文の随所に「旧記等」を参照して調べたことを傍記したと記している。実際に傍記の内容を見てみると、日記の中で抽象化されたり、婉曲表現が用いられている人物や場所、年月などに現実のそれを付記するといった考証的な試みが施されていることがわかる。

例えば、先に取り上げた「あさみどり」の歌が詠まれた場面では、本文中では登場人物を特定するような呼称は用いられていないが、底本の傍記に「万寿二年廿一日 斎宮御着裳 勅使藏人右兵衛佐資通進発 来月五日着裳云々」とあったり、勘物の「万寿二年十一月廿戊戌……仍差藏人右兵衛佐源資通為勅使」とあることなどによって、「参りたる人」（八〇頁）が源資通であることが知られるのである。

当該場面について、福家俊幸は次のように述べている。^①

私達はここに登場する貴公子が源資通であると知っている。

しかしそのことは御物本の傍注を通じて知るのであり、資通であるとはつきりと示す記述はない。そのことはしっかり認識しておいたほうがよいだろう。もちろん、この人物が資通ではないといっているわけではない。同時代の作者に近いところに存在した読者は源通通であることを前提として読んでいたはずだ。ただ作品の中にそのことを明確に示すことはない。そのことで、虚実相半ばした、物語の登場人物のような位相に、資通は置かれ、その人物と自分や同僚女房との関わりが記されていくのである。『更級日記』が事実を再現しようという目的、すなわち記録といった志向をもつて書かれてはいないことは明白だろう。享受の場に寄り添い、サロンで読まれることを意識して作られているのである。

福家の見解を敷衍すれば、ここに登場する貴公子が源資通であるということは「とばかりにてやみにけり」（八六頁）のくだりに記されている「資通于時云々」（一三八頁一行目）という傍記ならびに勘物によって特定されるのであり、日記の本文そのものはそのような前提知識のもとに読まれることを必ずしも要請していないことになる。

稿者はここで定家の注釈が間違いだと述べたいのではない。しかしながら、「参りたる人」を源資通とすることで読みを限定してしまうことになるということについては、より自覚的で

あるべきだろう。「参りたる人」に源資通をあてはめて読むことは、日記が享受されていた場や日記の書かれた意図を方向づけることになる。つまり、御物本の傍記に拠るところの考証的な読みは、孝標女が源資通と王朝の風雅を演じる体験をしたということを、当時の日記の読者が関心をもって読むことを前提としたものである。考証的な読みが読解の方向性を決定づける例として指摘できるだろう。

このことは他の箇所でも指摘することができる。

そのつとめて、そこを立ちて、下総の国と武蔵との境にある太井川といふが上の瀬、まつさとの渡りの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物など渡す。乳母なる人は、をそこなども亡くなして、境にて子うみたりしかば、はなれて別にのぼる。いと恋しければ、行かまほしく思ふに、せうとなる人いだきて率て行きたり。

(二六頁)

引用したのは上洛の記の中の一場面で、下総の国と武蔵の国の境でのことが記されている。「乳母なる人」は出産のため一行とは別々に京へのぼることになったが、「乳母なる人」との別れを恋しく思い、見舞いに行こうとする「作者」を「せうとなる人」が抱いて連れていってくれたという。

御物本では、この場面の「せうとなる人」の傍らに「定」後

大学頭、文章博士、今奉号和泉殿云々」(一二頁6行目)と書かれており、孝標女の兄定義をあてている。読者は、御物本の傍記によって「せうとなる人」に定義を重ねて読むことで、「作者」の周辺人物のイメージを補強しているのである。が、この箇所でも、「せうとなる人」という記述が後に大学頭・文章博士となる兄定義であることを理解して読むことが求められているかは疑問である。

一方で、『更級日記』には実在する人物を重ねて読むことを求めている表現も確認できる。「三条の宮」(三〇頁)や「侍従の大納言の御むすめ」(三三頁)などがそれにあたり、これらの呼称は実在の一条天皇皇女脩子内親王や藤原行成女のこととして読まれることを前提にしているとみてよい。御物本の傍記にも、それぞれ「一品脩子内親王」(四〇頁6行目)、「権大納言記 三月十九日卯刻 病者氣絶 悲歎之甚 不知可為」(四五頁9行目)と書かれており、実在の人物を想定しつつ読む読み方を補強している。『更級日記』において考証的な読みが有効であることの例として捉えられるが、これらの表現と先に示した「参りたる人」や「せうとなる人」などとは、テキストが読者に喚起するものの性質が異なるはずである。

このように見てみると、定家の研究成果によって『更級日記』の登場人物や出来事は史実との緊密な結びつきを獲得していることがわかる。ただし、それは「作者」の周辺の人物や出来事を注記によって史実と架橋させたものであり、『更級日記』の

本文のみから想像しうる「作者」の人物像との間には齟齬がある。要するに、現在通行している『更級日記』の「作者」像は、歴史書や男性貴族の日記から抄出した勘物や注記などで周辺状況を浮かび上がらせることによって、間接的に形作られたものである。

このようにして形成された「作者」のイメージをテキストに反映しながら読むことは今日でもある程度有効であると思われるが、傍記や勘物によって形作られた「作者」を無批判に受け入れて『更級日記』の読みに還元することは、「作者」と実人物としての菅原孝標女とを結びつけて日記に書かれている内容を単純な実体験の反映として捉えたり、日記の書かれた背景を特定の読みに限定してしまうなどの懸念がある。

御物本の傍記や勘物は、実際の出来事と対照したときの正確性という意味合いにおいて、一定の信頼がおけるものだと思う。しかしながら、「万寿元年歟」（六四頁7行目）、「万寿元年 若二年歟」（七〇頁1行目）、「高倉殿歟」（二二四頁1行目）などのように、末尾に疑問の「歟」が用いられている傍記があることも軽視されるべきではないだろう。不確実な情報については、定家もこのような形で留保をつけているわけで、傍記をどの程度本文の読みに反映させるかは、その意味からも絶えず検討を要するものであるはずだ。

これまでに見てきたことから言えるのは、『更級日記』における「作者」の人物像はかなりの程度藤原定家の営為によって

形作られてきたものだということがある。もちろんそうしたイメージを重ねてテキストを読むことは、『更級日記』の世界を一面では豊かなものにするだろう。だが、そのように形成されてきた『更級日記』の「作者」は、実在する人物としての菅原孝標女に一足飛びに還元されるものではないし、こうした検証により、書かれている出来事が孝標女の実体験であることが保証されるものでもないのである。

四

確認してきたように、『更級日記』は独自の構成意識によって実際の出来事を虚構を交えながら再構成したものである。また、今日『更級日記』の「作者」と認識されている孝標女のイメージは、藤原定家が書写した御物本の傍記や勘物によって形作られてきたものである。

このように考えると、『更級日記』の「作者」に孝標女をあてはめたり、登場人物に実在の人物を投影して読むことを当然の前提とすることは本文の読み方を特定の方向に誘導してしまう危険性を伴うということがわかってくる。また、『更級日記』の「作者」と作者菅原孝標女が結びつけられたとき、それは単にテキストの作者というだけでなく、テキストには作者菅原孝標女という苦悩や葛藤を抱えた人物の内面が自覚的にあらわされているといった誤解を再生産する可能性を絶えず抱え込むことになる。考証的な読みが、バイアスのかかった読みにつながる

てしまう可能性があることは意識しておくべきであろう。

御物本『更級日記』という写本は、注釈書などの形で今日の活字化された『更級日記』の本文では削ぎ落されてしまう要素を、テキストそれ自体と溶け合わせるようにして抱え込んでいる。あらためて、テキストと読みの問題を考えさせられる問題がそこに存在している。『更級日記』をはじめとする現代に伝わる古典の読解は、古典の本文それ自体と本文に近接する写本の書写者などによる傍記や奥書の存在に支えられてもいる。そうした要素について自覚的に捉え、本文との関係を見つめ直す必要があるように思う。

活字化された注釈書によって古典を読んでいると、無意識の裡に注釈書の注などに記されている情報を反映させて本文の内容を読んでしまうことがある。注釈書は現代の我々が古典を読む際に不可欠なものであり、そこに記されている情報はテキストの読解を深めるひとつの手がかりとして載せられているものである。だが、その情報が読解に有効であるかは絶えず本文に即して検討がなされるべきである。その際には、注釈書の情報がどのような資料にもとづくものであるか、またその資料がどのような形式で書かれているか、そしてテキストそれ自体は注釈書の情報を反映させることを求めているものであるか等を見極める必要がある。注釈書の情報は、テキストの読みを広げたり豊かにしたりすることではじめて意味をもつのであって、仮にそれがテキストの読みを狭めてしまうとしたら本末転倒であ

る。

古典文学の本来の形態である写本を通して本文と向き合うことで、活字化された注釈書では失われてしまっていたり、見えにくくなっている点などを明らかにできる可能性が生まれてくる。活字化される際に付加される句読点等の工夫と同じく、原本には存在しない傍記や勘物による情報もいったん棚上げする形で本文と向きあうことの必要性を感じさせられる。

注

(1) 『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇〇年十二月—二〇〇二年十二月）。

(2) 本稿における『更級日記』の引用は、秋山虔校注『新潮日本古典集成 更級日記』（新潮社、一九八〇年七月）に拠った。以下、『集成』と表記する。

(3) 御物本には「まのしてら」とあるが、「まの、てう」の誤写とみて「まの（地名）の長者」の意と解するのが通説である。

(4) 『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年九月）。以下、『新全集』と表記する。

(5) 『新全集』二八六頁頭注九に、「『在五中将の……』とあるから、この川は『すみだ川』である。この川は古く『すだ川』（スミダ↓スンダ↓スタ）と呼ばれたが、『あすだ川』と呼ばれた例はない。このため、底本の『中にゐてあすだ川』を、『中にい（ゐ）でぬ。すだ川』と改める説もある。いずれにせよ武蔵、相模の国境を流

れるとするのは、例の記憶違いである。」とする。

(6) 本稿では、作者の存在を前提としている「作品」という用語を避け、「テキスト」と呼称することとする

(7) 本稿では、『更級日記』の本文から想起される書き手のことを「作者」と表記し、実在の人物としての『更級日記』の作者菅原孝標女と区別する。

(8) 土方洋一「日記の声域―平安朝の一人称言説」(右文書院、二〇〇七年四月)「あとがき」(二九五―二九六頁)。

(9) *8所収論文。

(10) 久保田淳『新古今和歌集 上』(角川学芸出版、二〇〇七年三月)に拠った。以下、『新古今集』と表記する。

(11) 福家俊幸『更級日記全注釈』(株式会社KADOKAWA、二〇一五年二月)。

(12) 御物本『更級日記』は、橋本不美男編『御物更級日記』(笠間書院、二〇〇九年四月再版第三冊発行)を参照した。本稿で御物本を引用する際には、右記の頁と行を付した。

(13) 『集成』八七頁の頭注一〇に以下の記述がある。「仲俊のほかにも子があったが、お産はもとより俊通との交渉についても何ら記されていない。……俊通の下野守着任は長久二年(一〇四一)だから、この年は帰年の年にあたるが、それについての記事もないのである。」

(14) 『集成』七四頁頭注七。

(15) 『新全集』解説より引用。